



桃太郎（26）

桃太郎がふり返ると、きじはていねいに、おじぎをして、「桃太郎さん、桃太郎さん、どちらへおいでになります。」

とたずねました。

「鬼が島へ、鬼せいはつに行くのだ。」

「お腰に下げたものは、何でございます。」

にっぽん

「日本一のきびだんごさ。」



桃太郎（27）

「一つ下ください、お供しましょう。」

「よし、よし、やるから、ついて来い。」

きじもきびだんごを一つもらって、桃太郎のあとからついて行きました。

犬と、猿と、きじと、これで三にんまで、いい家来ができたので、桃太郎はいよいよ^{いさ}勇み立たって、



桃太郎（28）

またずんずん進んで行きますと、
やがてひろい海ばたに出ました。

そこには、ちょうどいいぐあい
に、船が一そうつないでありまし
た。

桃太郎と、三にんの家来は、さ
っそく、この船に乗り込みました。
「わたくしは、漕ぎ手になりまし
よう。」

こう言って、犬は船をこぎ出し



桃太郎（29）

ました。

「わたくしは、かじ取りになりま
しょう。」

こう言って、猿がかじに座りま
した。

「わたくしは物見をつとめましょ
う。」

こう言って、きじがへさきに
立ちました。

うららかないいお天気で、まっ



桃太郎（30）

青な海の上には、波一つ立ちませ
んでした。稲妻が走るようだとい
おうか、矢を射るようだといおう
か、目のまわるような速さで船は
走って行きました。

つづく

